

書評

Mikael MADEG,

Surprenants Surnoms Bretons, Brest, 1998

宮松浩憲

これは黄色の表紙で、菊版の2段組、173頁からなる小さな本である。タイトルを直訳すれば、『ビックリするようなブルトン人のあだ名』となるが、ところどころに挿入された漫画からもこの本の内容を読みとることができる。ここには1217件のあだ名が収録されているが、これは著者が収集した17,000余のあだ名のほんの一部に過ぎない。対象となる時代は、中世や近代にまで遡らせているごく一部を除いて、著者が20年近くかけて聞き取り調査をしたと言っているごとく、まさしく現代である。地域は低地ブルターニュ、つまり西ブルターニュ（フィニステール、コート・ダルモール、モルビアンの3県）に住むブルトン人（5世紀中ごろからのアングロ・サクソン人の侵攻を逃れて、イギリス本土からフランス西北端のブルターニュ地方に移住してきたケルト人の末裔）である。記述の形式は章当たり53から210の、アルファベット順に配列されたブルトン語のあだ名にフランス語の訳が付され、そして十数行程度からなるフランス語の解説がそれに続いている。あだ名の成り立ちについては、その殆どが現地の人々——少し前まではブルトン語を話していた——から聞きだしたものであるが、著者による推量も含まれている。本来ならば、フランス語に訳せないあだ名があることからも、ブルトン語を対象としなければならないのであるが、評者にはその知識はなく、フランス語ですまさざるをえなかつたことを最初に断つておかなければならぬ。

また、以上のごとく、これはあだ名小辞典とでも言えるもので、厳密には書評の対象にはなりにくく、ここでは図書紹介のつもりで少し書いてみることにする。

この本には著者の詳しい経歴については何も語られていないが、中学校の教師をするかたわら、文筆活動や研究に携わっているようで、あだ名に関する著作はこれを含めると5冊を数えるとのことである。従って、研究者ではあるが、厳密な意味での歴史家ではない。しかし、収集家としての仕事は見事に果たしている。目次は次のようになっている。

第1章 額に汗して

第2章 海岸の住民

第3章 労働者階層

第4章 「ええ、お客様。何か」

第5章 乞食と放浪者

第6章 永遠の生命のこちら側

第7章 教師さん

第8章 小僧と小娘

第9章 音楽と共に

第10章 よそ者とのけ者

これらの章の一部を簡単に紹介すると、次のようになる。

第1章では主として農民が取り上げられている。「股鍬のルイズ Louise Le Croc」は自分の畠はもちろんあるが、ときどき他人の畠でもジャガイモを盗むためにこれを使用していたようである。次も「棍棒のフランソワズ Françoise le Bâton」と呼ばれた農場の女親分で、手に棍棒を持って、怠ける作業人を叩いていたとのことである。「藁の山のフランソワ François le Tas de Paille」は収

穫後、藁の山を線上にきれいに作っていくことを得意としていたようである。同じく、農作業の技術と関係するのが「短い畝 les Court-Sillons」と呼ばれていた同名の農民がいた。ブルターニュの農場はボカージュ Bocage と呼ばれる、いろいろな形の小さな農地の集積で、そのため中世のセーヌ川以北の地域と比べて畝は短かった。それでも方形がつくれる箇所では比較的長い畝がつくられていて、牛に牽かれた犁が入れない四隅だけはこのあだ名にあるような短めの畝が作られていた。しかし当のフランソワは不器用から長めの畝が作れず、いつも短い畝ですませていたためこう呼ばれたとのことである。著者はここに効率の視点を持ち込んでいるが、それによれば、この男は近代化に乗り遅れてしまった、または金持ちはなれない運命にあったことになる。また、「真っ直ぐ畝のモリス le Sillon Droit」は器用なためではなくて、どうしてもそれが出来ないので、嘲笑の意味でこのあだ名がつけられている。「緑の糞 Merde Verte」も不器用な男につけられたあだ名で、いつも多くのキャベツを作っていて、葉っぱの処理がうまく出来ず、庭に放置して腐るがままにしていたことからこのあだ名がつけられた。彼らと正反対なのが「黄金の指 le Doigt d'Or」のジャンである。金持になつた男は東西同じで、大型の金の指輪をはめて富裕さを誇示していたようである。「切株を食べる Le mangeur de souches」男は本当に切株を食べていたのではなくて、上記のボカージュを嫌って、その特徴である木々や土手を取り除いて平地にしてしまったため、こう呼ばれたのである。「レタス la Laitue」のジョゼフはプルガステル村で最初にレタス栽培を始めた人であったとのことである。

第2章では漁師のあだ名が集められている。農村では農作物があだ名の中に取り入れられていたと同様に、ここでも大きい目をしていたある男が大きな目玉をもった「タラ Le Tacaud」、「タラの目 Yeux de Tacaud」とあだ名されていた。魚介類を常食としていた者にとって喉に骨が刺さって苦しんだことは数え切れないほどあってであろうが、「魚の骨 l'Arête」をあだ名にもつたこの人の場合、

3代にわたってそのように呼ばれたとのことである。商売があだ名になった例としては、ヤリイカの行商をしていた「ヤリイカ les Encornets」のルイズがいる。また、「イカ骨 l'Os de Seiche」とあだ名されたポルは捨てられた軟骨を集めることを商売にしていた。そんなものなぜとの疑問には、それがパリの鳥屋さんに送られていた事実が答えてくれている。少し卑猥になるが、女性につけられたあだ名「クリームスープ Soupe de lait」のクリームスープには特殊な意味があり、漁師の亭主が非番のときに彼女が吸っていたことからこのように呼ばれたと著者は説明している。「雌牛 les Vaches」のフランソワはまったく場違いのあだ名であるが、仕事が終わって直ぐに帰宅する口実として「乳搾りが待っているので」が常用されたため、このあだ名がつけられたようである。同じく、ある船主に「下戸 Gars sec」のあだ名がつけられていた。船員に酒代を出してやらないケチな男の意味のほかに、20世紀初頭に漁民の間に禁酒運動が展開されていたことと関係づけている。最後に、「帽子のイヴ Yves Chapeau」に関しては、漁師はつばのないベレー帽を被るのがならわしであったが、隣接する農村に住むイヴはつばのある帽子を被り、牛を引いて散歩したりしているのが見られたのでこうよばれたようである。「藁を詰めた木靴 Sabots de foin」は漁師でありながら、農民のように藁を詰めていたのでこのあだ名がつけられた。このように、漁村からも農村とのコントラストを確認することができる。

農村に比して、心性と結びついたあだ名にこれと言ったものが登場しないのはどうしてであろうか。職場が海上で人間関係が限定されていて、周囲の環境などと結びつくことが少なかったためなのであろうか。また、ここでの特徴は船名、岩礁名などがあだ名に加えられていることである。船名をあだ名に加えることは非別として、心性史研究の材料は探せばあるということになる。

第3章は労働者階級に当てられている。ここでは採石場や火薬工場といった大きな仕事場で働く人から、炭焼き小屋、狩猟、鍛冶、粉挽きなど個人単位で働く

ていた人々、それに駅や郵便局で働く公務員などが取り上げられている。仕立屋 Tailleur, 靴屋 Sabotier などでは職業名がそのままあだ名となっているが、炭焼き, クレープ屋に関しては、炭 Charbon, クレープ Crêpes といった作り出す商品、たが職人、織工、モグラ取り、密猟者に関しては、たが Cercles, 枠 Navette, モグラ Taupes, カワウソ Loutre・兎 Lapins といったように、使用する道具や材料があだ名として用いられている。また、これほど直接的ではないが、職業を特徴づける特殊な表現も多く見られ、「黒い口 Bouche Noir」とあだ名された男は、この地域に広く存在していた伝統的な鍛冶屋さんであった。また、女性に「船 le Bateau」のあだ名が付けられている場合、それは洗濯女を意味し、船とは動く船ではなくて、川岸に固定された仕事場としての洗濯船を指していた。屋根葺き職人に伝統的につけられたのが「鼠を片目にする Eborgneur de Souris」男である。それは、屋根を修復するために新しい藁を差し込むために使用する棒が屋根に住みついた鼠を危険に晒していたためである。石工に付されたあだ名としては、食べ物の話しかしない者につけられた「食い物 La Nourriture」、持ち場が端にあった者につけられた「端っこ du Bout」、石を背中に乗せて帰り、それで家を建てた者に付された「背中で家 Le Dos de la Maison」などを見かける。郵便配達人に与えられたあだ名としては、余計なことは何も言わず直ぐに立ち去る者に与えられた「じゃあまた。有り難う Au Revoir Merci」、いつも同じ言葉を発して自転車に跨っていた者につけられた「さあ、馬たち Chevaux」、そして話好きで1日に5回もお呼ばれに応じた者につけられた「五食の男 Le Gars aux Cinq Collations」などがある。またここでも兼職者は色眼鏡で見られており、畑仕事にも精を出していた石切工や工具には「雌牛 La Vache」や「農村で à la Campagne」のあだ名がつければ、配達を早くすませて醸造業を営んでいた郵便配達人は「リンゴ酒 Cidre」とあだ名されていた。

また、あだ名に同じ言葉が使用されていても、その意味も、それがつけられて

いた人物の職業も同じとは限らなかった。「穴掘り人 le Troueur」は墓穴掘り人に、単なる「穴 les Trou」は道路に空いた穴を埋める道路工夫につけられたあだ名である。「汽車 le Train」のあだ名が石切工夫につけられた理由は職場に汽車のように速く行くことからつけられ、「2時半の汽車 Le Train de Deux Heures et Demie」のそれは定時に出勤する職人に、「9時の汽車 Le Train de Neuf Heures」は人より遅く仕事を始める女性の日雇い労働者につけられていた。数字を含んだ表現も同じで、「30スー les Trente sous」は低賃金の石工が無知でないことを証明するためにフランス語でこのように言っていたことから、「1800エキュ Dix Huit Cents Ecus」は日雇いの洗濯女がこの高額の金を嫁資としてもらったと吹聴していたことから、「100キロ les Cent Kilos」は100キロの小麦粉が入った袋を運ぶ仕事をしていたパン屋の奉公人につけられていた。そして「1000 フラン Mille Francs」は発明報酬として大金を手にした工場労働者につけられたあだ名であった。

これ以外に、職業や状況が不明のときは、理解不能なあだ名もある。例えば、お客様の注文通りに仕上げていた床屋さんにつけられた「お好きなように Comme Tu Voudras」、犬に噛まれた日からそう叫ぶようになった言葉から郵便配達員につけられた「犬の糞ったれ Crottes de Chien」、いつもけんか腰の態度を取っていた石工につけられた「赤い雄鶏 Le Coq Rouge」などがそうである。

第4章では、町で店を構えているか、通りで商売をする人たちのあだ名が取り上げられているが、その中でもとくに食堂や飲み屋の経営者と売春婦が目につく。

前章との関係では、ここでも、「チョコレート Chocolat」、「キャンディー Bonbons」、「蜂蜜酒 Hydromel」、「丸パン Miche」、「牛乳 Lait」、「卵 Œufs」など、職業があだ名になっている人たちが確認される。「松笠 Pommes de pin」のあだ名は火を起こすために広く使用された松笠を集めて町に売りに行っていた貧しい人々の暮らしを思い出させる。また、「鏟 Spatule」とあだ名されたクレー

プロ屋さんのように、仕事で使用する道具があだ名になっている場合もある。さらに、炭焼き人のみならず、炭売りも「黒い口 Bouche noire」とあだ名されており、炭関係の仕事に従事する者は共通してこのように呼ばれていたことになる。

売春婦には借部屋代から「10 スー Dix Sous」、その倍額に相当する「4 レアル Quatre Réaul」のあだ名をもつ姉妹、料金を表しているのかよく分からない「菊ぢしゃの包み」と呼ばれた女性、もっと簡単明瞭に「大柄、いつでも Grande Ouverte」とあだ名された女性がいた。しかし、彼女たちだけがこの仕事をしていたのではなくて、「ドレスの裾をまくり上げる Trousse la Robe」とあだ名された飲み屋の女将は酒を出すだけではなくて、もっと儲かるこの商売もしていたようである。居酒屋も、子供達がいつも騒ぎまくっているところでは「家の中では静かに la Paix dans la Baraque」のあだ名がつけられ、外にビンを山積みしているところでは「ビン les Bouteilles」のあだ名が、そして教会の前にあって、毎週日曜日に教会から出てくる男たちが立ち寄っていたところの主人は「9時のミサ la Messe de Neuf Heures」とあだ名されていた。漁師町で小酒場を経営する女将の夫につけられた「無為の王様 Le Roi Fainéant」は、日本で言う「髪結いの亭主」と言ったところであろうか。

ジャガイモの買付人につけられたあだ名「下落 La Baisse」は商品を安く買うために彼が常用していた文句「明日は値が下がるよ」からきて、家畜商につけられたあだ名「相場が悪い Le Cours est mauvais」は彼の口癖で、それを信用するものはいなかつたであろうとのことである。「お金の袋 Le Sac de l'Argent」は個人バスの運転手につけられたあだ名で、それは料金入れをぶら下げて、「さあ、ここに来て払ってください。この私の料金袋に」と大声を出していたことに由来する。「すてきな品物 Belles Choses」は女ものを売り歩いていた女性につけられたあだ名で、これも彼女の売り声からきている。商人の信頼を決定づける計量からは、「正確 Juste」や「殆ど正確 Presque Juste」といったあだ名がつけら

れていた。大きな耳をもつ者には「キャベツの葉っぱ Feuilles de Choux」のあだ名がつけられていたようである。

最後に、9名の人物に「穴 Trou」の字を含んだあだ名が、前章の道路工夫（この場合は複数形であったが）と同様に、つけられていた。いくつかその例を挙げてみると、町外れの、ちょうど穴のように低くなったところで小酒場を営む男にこのあだ名がついている。同じく、「冷たい穴 Trou froid」と呼ばれるある女の酒場の50メートル先に「暖かい穴 Trou chaud」と呼ばれる別の飲み屋が店を開いていたが、これらは何れも地名に由来する。幹線道路沿いにある飲み屋の女将につけられた「穴 Le Trou」と「棒を振り上げて à Coups de Bâton」からなるあだ名の由来は不明であるが、「シュシャンを出す穴 Trou à Chouchenn」と呼ばれる女将については、そのあだ名は店で出される特殊な飲物（Chouchenn = 蜂蜜酒）と関係していた。「喜びの穴 le Trou du plaisir」と呼ばれる家に住み、自身もそう呼ばれている売春婦や、「共同の穴 Trou commun」と呼ばれている別の売春婦がいたが、これらには何の説明も要らないであろう。

この後も、日常生活の一こま一こまを思い起こさせてくれる、こういったあだ名が延々と挙げられている。既に、明らかにしている如く、これはあだ名小事典といった類のもので、ある考案に従っていると思われる章立てを除くと、全体を貫く視点はどこにも見られない。また、あだ名の取捨選択に関しても、その規準が明らかにされていない。この時代の心思を明らかにするには、あだ名の全体または総体を把握しておく必要があることから、これは評者としては是非示しておいてほしかった。

しかし、この書の利用方法はいろいろあると思う。農村と都市、在の者とよそ者、農村と漁村、金持ちと貧乏人といったテーマで切り込むことも可能であろう。例えば、金持ちと関係するものを挙げると、最もはっきりしているのが「金の指 le Doigt d'Or」のジャンで、目立つ金の指輪をはめていたからである。今日で

も、成功者の多くは高価な高級ブランド品を身につけるのを好むのと同じである。「金のズボン Pantalon d'Or」もいつもズボンのポケットに金目のものを入れて持ち歩いていたことを意味している。「パン・セック le Pain Sec」のクリストフには説明が必要である。パン・セックは直訳すると乾いたパン（但し、その反対のパン・ユミド pain humide の表現はない）となるが、本当は食べるときにパンにバター、ジャムなどをつけないことを意味する。つまり、このように僕約したから金持ちになったのだと言うことである。「黒い手 la Main Noire」は油で汚れた手のことで、それは高価なコンバインを所有していることを意味していた。「寄せ集め人 Le Ramasseur」は金で集められるものは何でも集める人のことであった。「大きな家 la Grande Maison」と「新しい家 Maison Neuve」は説明を要しないであろう。但し、ブルトン人の間では金持ちのあだ名として通っていた「堆肥の山 Tas de fumier」がフランス人の間では全く異なった意味を持つことには、十分な注意が必要となる。このように、外国人でも比較的容易に理解できるものもあるが、時代背景や地方慣習を知らないと全く逆の解釈をしてしまいそうなものもある。しかし、これによってこの地域の人々が金持ちに関してどのようなイメージを持っていたのかを垣間見ることが出来る。

この書の最大の価値は、何と言っても、あだ名の由来が明記されていることがある。つまりそこには、実際にそのあだ名が使われていて、そう呼んでいる人も呼ばれている人もその意味を知っているという事実がある。それは同時代性という強みを持っている。これに対して、これから評者が取り組もうとしているのは同時代から1千年も遡る中世の、自国から遠く離れた西ヨーロッパの人々のあだ名である。

この事実を前にして、どのようなアプローチが考えられ得るのであろうか。11、12世紀に関して最も多くの人名を提供してくれているのが、宗教組織の文書集に収められた法行為を記した文書にある証人リストで、ここから身分、職業、性別

などを異にする十分な数の人名の収集が可能である。しかしその場合、法文書という性格から、名前とあだ名が記されているだけで、職業が付記されることは非常に稀で、ましてやあだ名の由来が記されるなど考えられもしない。これを補うのが聖者文学、歴史書、年代記、編年記などのラテン語で書かれた記述史料と民衆語で書かれた文学作品である。ここでは手柄を立てたり、悪行を働いたりした場合、それを賞賛または非難するためにあだ名が持ち出され、それにその行為の発生原因が求められていることがある。この由来探しは気の遠くなるような作業であるが、その苦労をある程度軽減し、方向を示してくれるのが人名辞典、語源辞典、諺辞典などである。そして、最後に役立つのが、もちろん時代の違いを十分に認識したうえでのことであるが、ここで紹介しているあだ名の由来やその持ち主の職業が明記されたあだ名辞典である。ここには、近世や中世にまで溯るとされるあだ名が挙げられており、同時代性の可能性を非常に少しであるが残している。また、ここでは少数民族のケルト人のあだ名が問題になっているが、彼らはフランス人と深く浅く接触しながら生活していたのであり、フランス人と共通するものが少なくなかったことも確かであろう。これによって、日本人流の考え方を持ち込むという危険性を回避することが可能となる。

筆者はかつてある論文で次のように言ったことがある。西欧中世史に関して、新しい史料の発掘は殆ど期待できない。中世の史料は限定されていて、殆どが利用されてしまっている。従って、残されているのは、この限られた史料に新しい角度から切り込むことであると。史料として、修道院文書集は宝庫中の宝庫で、その中に収められた文書の本文を使った研究は我が国でも既に定着していると言うことが出来るが、それ以外の部分の活用となると、少なくとも我が国では、殆ど試みられていない。それへのアプローチを可能にしてくれる方法の一つがこの人名学研究である。しかし、これも我が国では殆ど手がつけられていない。外国では人名学は確立された学問で、それだけの雑誌も発行されているように、独立

した研究領域を形成している。しかし、この人名学では人名の外的研究、つまり、成立したあとの人名とそれに基づいた家系学が中心となってきた。そのため、人名となる前のあだ名、添え名、呼び名といったものが研究の対象になることが殆どなかった。評者が目指しているのは人名の内的研究、成立する以前の人名を研究する歴史人名学とでも呼びうる学問、そしてとくに人名を通してその社会を構成する人々の心思を明らかにしようとする試みである。人名の成立後では、人名と心性との間に乖離が生じてしまい、この学問は成立しにくくなる。それ故、姓といった制度化されたものではなくて、あだ名という成立過程の人名が問題となるのである。そしてこれは中世ヨーロッパ史のみならず、古代ギリシア・ローマ史においても、心性史研究の有効な手段となることは言うまでもない。